



子供讃歌（八）

倉橋惣三

七 我 が 子

數限らない子供讃歌の中でも、彼にとつて最も絶對の歌は、我が子への讃歌である。絶對というのは、大きいとか貴いとかいう意味ではない。他とならべられない。眞に彼の歌、彼みづからの歌という意味である。従つて、それは人まゑに餘り聲高にうたうべきものではあるまい。又、なんのかと、かれこれ説明づけるべきものでもあるまい。たゞ獨りでハンミングしているがいゝものである。たかだか、幸福の感動を盛り上げる、頌句の一節として、自分に繰りかえしていればいゝものであろう。

しかし、この幸福なくして、子供讃歌は決して完うせられないと、彼は信するのである。完うせられないなど、言いきることが、この幸福をもたずとも、優れた子供讃歌を唱う天才に對して憚りありとすれば、兎に角彼自身は、この幸福をもつて自分の子供讃歌を完うし得ていることを、感謝するといおう。だれでも、親となるだけで、子供讃歌の純樸眞實な原始詩人になるのである。

我が子は、子供というものではない。多くの子供の中の一人でもない。この子である。この子というも、たゞこの子であるだけではない。我がこの子である。我がのがはくれんも所有のがではない。断ちまかれることのない關係によつて特定されているこの子である。——言わずときまつていることを言うからや、こしくなるようなものゝ、もう少し言わせて下さい。——すなわち、特定の關係で絶對であるものへの讃歌であるから、格別感激もせず、讃嘆する

でもない、謂わば歌うでもなく日光を讚え、歌うでもなく空氣を讚えているような平生讚歌である。更めて歌にしよ
うとする心も起らなければ、どんな歌にしても歌いつくせない。つくそうとすれば却つて空々しく、強いて言だてす
れば、誇張紛飾の虛に陥る。——その意味で、彼の我子讚歌は、我が子を讚ゆるに金銀寶玉にたぐえて、しかもやも
と歌つてゐる程度の古歌を引くことを決してしない。(いかに多くの親が此の古歌で平氣に満足してゐることか。但
し、同じ古歌でも、『瓜はめば我が子おもほゆ』の卒直な歌い出しには、彼もほゝえまじさを禁じ得ない)といつて、
彼の我が子讚歌は、ベツレヘムの星を仰いで集つた東方のひじりたちの頌歌を眞似るものでは素よりない。若し學ぶ
とすれば、

『おゝ わたしは ビホム 見つめる

母に抱かれてゐる おさな子を

(ホイットマン)

の、あのたつた二行の短い詩である。

子供というものでないから、我が子が、彼にとつて心理學の對象にならなかつたことは、言うまでもない。それは
普通の親にとつては當りまえのことであるが、子供というものに對しては心理學者を以て任する彼において、我が子
に對しては、どうしても、そうであり得なかつたのである。これが正しいことであつたか、どうかは知らない。折角
目の前に與えられた乳兒を、たゞ Batoid するだけで、Observe することなしに朝夕を過ごしたことは、彼が日頃
敬意を以て讀んだ、ブライエル其他の乳兒觀察者に對して、學者の本領を怠つたものであつたのかも知れない。しか
し彼は、我が子の柔い唇を砂糖湯の一滴を以て喜ばすことはしても、食鹽やキニーネの溶液を以て、初生兒の味覺を
テストしてみるような研究態度(?)は、思ひもかけないことであつた。彼は我子をよるこばすために、色玉とガラ
く(とを早くから(家人に笑われるほど早くから)用意することを忘れなかつたけれども、觀察帖片手に、正直にい
えば、觀察帖を備えておいたことは備えていたが)初生兒の視覺と聽覺の發達を觀察したり、況んや實驗したりする
ことはできなかつた。もつと、正直に言えば、そうした研究の好機會を週から週へと空過(?)しつゝ、我が子の初
生時期が経過して仕舞つたのである。——彼はそれを決して後悔もしなかつたけれども、おれは學者にはなれないわ
いと微笑した。我が子は客觀の對象にすべく、餘りに我が子であつた。

彼は附添いが測つてくれる我が子の體重身長を、乳幼児身體標準發育表にくらべてみることは忘れなかつた。しかし、その小さきものの精神の發達については、個々の精神活動のあらわれを記載するよりは、周圍のものに對する人間反應の微妙な發現を見のがさなかつた。そのスマイルは、笑いの表情そのものとしてではなく、彼に向つてのほゝえみとしてほゝえみかえされ、そのおかたりは、言語發達のラーレンの一段階としてレコードされるよりは、彼に對しての語りかけとして語りかえされ、何ごととも、心的發達という抽象機能としてよりは人間の中で育つ人間的發達の刻々として喜び受けとられた。そうして、我が子において『人間』の發達のこまやかさと早さに、日々心をおどらせられたのであつた。そのかわゆさも、我が子だからでなく、この人間反應の中に萌え育つていつたのである。

親と子の關係の中に育つものは、子であると共に親である。親は子によつて生れるといつて奇警に響くならば、親も子によつて育つと穩かな言い方にしておこう。ウオルツオースの 'Child is the father of man' という句は、いろ／＼の意義に解せられ、その含蓄も限りなく深いものであるが、初めて親となつたものゝ、大して深く掘りさげもしない、ありのままの感じにも、彼はこの語句を、極く淺いところで借用したいと思つた。

親が子によつて生れるのは、一番初めの子の時だけではない。二番目の子の時でも、三番目の子の時でも、その子の親として新たに生れるのである。そうして、その子と共に、その子の親として育つてゆくのである。親子の幸福は共に生れて共に育つことである。故に、親子の幸福は、子ごとに新たに生じて、日々に常に新鮮である。親子の愛というのも此の幸福の相互の感受に他なるまい。敵をとまで、いわなくとも、愛さなくてもあるものを愛する時、愛は美しかつたり貴かつたりして、聊か大げさなことにもなる。親子の愛は、何もそんな特別なことではない。ロマンチックの色どりを帯びるものでもない。モーラルの光澤や、フィロソフィックな織り彩をもつものでもない。だから我が子讃歌も亦そうである。だが、この實感を缺いた子供讃歌は、到底完成曲たり得ないであらう。

彼は豫てペスタロッチ傳を研究して、此のスイスの農村改革の熱烈青年精神が、あの深き教育精神にまで昇華されていつた主要な契機を探ぐつて見て、その第一の契機を、青年が初めて父になつた日に見出したことがある。それは彼が見出すまでもなく、ペスタロッチの主著の一つの『隱者の夕暮』にしみ／＼と書かれていることである。あの大

教育者に、教育の大目的のために教育を築かせただけでなくて、心の底から教育の泉をにじみ出させたのは何んである。淋しいノイホフの村の夕暮に、しかも、貧窮と迫害と困憊との間に、我が子ヤコブを抱きつゝふけた、若き父としての謙虚な内観であつたのである。この、父としての内観に恵まれる機会がなかつたならば、ペスタロツチの生涯も、教育事業家としての大きき位に終つたかも知れない。又、頭のいい教育原理の組織者ぐらゐに終つたかも知れない。ペスタロツチの教育者としての眞の生涯が、いつも潤れることのない、親ごゝろの發露であつたことは、更めて言ひまでもないことである。

但し、こゝに此の所感を抉むのは、彼の小さな我が子讚歌のために、大ペスタロツチを引きあいに出席とすることはない。そんなことは不遜の極みである。たゞ擴大鏡の力を借りて擴大してみただけである。尤も擴大し過ぎて、何がなんだかぼんやりして仕舞つた感もある。

我が子の實感とはどういうことであろうか。我がこの子であると共に、この子の親であることの、必至のコンネクションの切實感と自覺とである。抱きしめる腕に切實感が湧きあがることである。見入る癡顔につく／＼と自覺を促されることもある。又、その切實感にして自覺にしても、いつもそう／＼迫り来る緊張の形ではなくして、たゞ、ふうわりと無心の底に溶けていることもあり、或はそういう時の方が多いかも知れないが、緊迫にせよ濬和にせよ、一分のすきまもないのが、親子のコンネクションの實感である。

そのすきまのなさを、他の方面から言つてみれば、親と子とは、何かの理由で結びついたものでもなく、愛によつて結びついているものでさえもない。結びつきこそ理由であり、結びつきそのものが愛なのである、これをもう一歩進めて言つてみれば、子を選んで親となつたのでもなく、親を選んで子となつてゐるのでもない。それどころか、それも／＼親と子と二者の結びつきではなくて、實存する事實は、たゞ一本の紐であつて、その両方のポールが親と呼ばれ、子と名づけられてゐるだけである。一本の紐というのが味がなさ過ぎるならば、きづなといつてもいい。えにしといつてもいい。

こんなことは、更めて考えるまでもないあたりまえのことであるが、この我が子の實感を人の子に押しひろげたところに、ペスタロツチの人間教育の本来があつたのではあるまいか。孤兒の慈父としてのスタンツのペスタロツチにそれが溢れているのはもとより、ブルグドルフやイヴェルドンの學舎の教師としてのペスタロツチの横顔にも後姿に

も、それが、掬めばくむほど、澁きず流れ出ているではないか。性格分析者は、これをペスタロッチの柔和なハートと、人道主義的スピリットと、自己犠牲的パーソナリティーとに歸する。それも確にそうである。しかも、我が子ヤコブリとの實感が、ペスタロッチを、こうした教育者に生んだのではないと、誰れが言えようか。かくて、ペスタロッチは、すべての教え子に、我子の實感をうつしたのである。そこに『人類の父』としてのペスタロッチの教育生涯があつたのである。念のため言い添えておくが、ペスタロッチはヤコブリにおいて、人目につくような教育的成功をあらわした譯ではない。——眞に我子の親でさえあり得れば、その結果(?)は、假りにどうであつてもよいではないか。

彼が自分の日記にでも書いておけばよいことを、傍から長々と敍し過ぎたようだ。そのうえ、子供讚歌の一節にするために、禮讚する古人の例まで借りものにして、彼自身の體驗以上のことを實感として語らせもしているようだ。それも、世にいう親馬鹿の稚氣ならまだしも、きざな親がりとしての笑いになることをおそれる。たゞ我が子への實感を、子供讚歌の中へ、一言でも加えておきたい親は、世に必ずしも少くはないと思われる。更に親としての誇りや自慢や手柄話ではなくて、我が子の親たり得たことの謙虚な感謝(必ずしも、こゝにあてはまらない文字かも知れないが)を、大切な實感として心に藏している親は、世に一層少なくないことゝも思うのである。そういう親たちにはこういう話を讀んで貰えると思う。

とにかくも、彼の兒童觀が、親になると共に變つてきたことは著しい。親になると共にといつてそう急激にはない。親になるにつれて段々にといつた方が正しい。親心は子供の生長につれて熟するものだからである。著しいといつても、どう著しいのか、そうはつきりしたことでもない。親心というものが觀念的に明確なものではないからである。しかし、強いて言つてみれば、子供を外に眺めるのに對して、内に感ずるようになつたともいおうか。むづかしくいえば、認識の對象から體驗の實存になつてきたといおうか。いづれにせよ、對象といつたような客觀的のものでなく、わがもの、わが内なるもの、つまりはわれそのもの——われの子供か、子供のわれか——として渾一的のものである。その渾一性は、研究對象、教育の對象といつた、(愛の對象という場合でさえも)近いながらも——近づこうとする距りをもつものでない一體一如のものである。この渾一性が、『わが子において殊に著しいのは當然でありその點で』わが子えの親のエゴイスマスが存するのゝ免れないことである。(三三頁)

に非常に大きな影響をもたらしており、教育内容を構成する重要な契機となつた。

緊辭上。

第一章。

註六 「民家黨家解」享保二十年版卷之三附錄。

註七 中の上貳の上天保十年板十三丁裏。

註八 「論語」述而篇。

註九 「慣用啓蒙」

註一〇 「羽陽叢書」による。

註一一 「傳習錄」卷之中訓蒙大意。

註一二 「孝經外傳」或問三、蕃山全集三、九十八頁。

註一三 東大圖書館藏寫本による。

註一四 「安齋隨筆」十一。

註一五 「孝經外傳」或問三、蕃山全集三、九十八頁。

註一六 東大圖書館藏寫本による。

註一七 「集義和贊」五、蕃山全集一、一二五頁。

註一八 「名君示諭」日本教育文庫、家訓篇五二六頁「松平定信示諭」による。

註一九 安永二年板八丁裏。

註二〇 「集義外書」一卷、蕃山全集二、三頁。

註二一 「安齋隨筆」十一。

註二二 「山鹿語類」

註二三 同右

註二四 「續鳩翁道話」貳之上。

註二五 益軒、幽學、宜長その他多し。

註二六 「養生叢論」

註二九 天明四年板三十二丁裏。

註三〇 嬰鳴館遺草卷の三、天保六年板一丁裏。

註三一 「和俗童子訓」卷之三隨年教法。

註三二 學制近。

註三三 道德百話三十六。

註三四 養母。

註三五 「養生訓」卷第一總論上。

註三六 蔡洗子の條下。

註三七 「授業篇」卷一、天明三年板四丁裏。

註三八 文部省「日本教育資料」四、三百三十六頁。

(三六頁より)

親のエゴイスムスによつて社會的には屢々忌むべきことも起り、又もつと屢々、人間的に笑うべきようのも起る。そこには戒むべきこと省みるべきことも少くないであらう。しかし、彼は、エゴイスムスになれるほどの、強く深い児童觀を、わが子において初めて體驗し得たのであつた。そのあとは、よその子、社會の子に、どこまで、この親のエゴイスムスを、移入させ得るかどうかであり、それは、親としての長い修業に屬することであらう。とにかく對象觀的な距りを抜んでの児童觀以外の渾一的児童觀を體得したのはわが子のおかけである。感謝すべきかな。

(訂正。三月號の『子供讃歌』中二十六頁第一行のオーエンはオーケンの誤植)